

R&V

1993年
春号 4月～6月
第9号

ベテランの復活を望む

今年の春山合宿は鹿島槍の北壁と荒沢奥壁のはずだった。これがメンバーの関係で赤沢岳西稜になり、今度は日程の都合で北鎌尾根、加賀白山、剣岳になった。さも最もらしい理由による変更であるが、根本的な原因はメンバー不足によるものである。

当会は会員数からいえば減ってはいないが、いわゆる現役は少なくなった。年間4～5日の山行では現役とは言いたくない。さらに会員の技術的レベルはかなり低くなった。たとえ頭数がそろっても現在のレベルでは荒沢奥壁に登れる会員は2～3人であろう。以前、新人がそういったルートを登れるようになるまで3年位だったであろうか。今は5～6年はかかる。いや今のままでは10年たっても登れないだろう人もいる。それは新人の山行回数(日数)が少ないからである。最近の風潮として趣味は山だけといった人は少なくなり、登山は、いくつかある趣味の中の一つに過ぎないのである。

しかしそれよりも、もっともっと重要な問題は指導的立場にある者達の責任にある。新人の頃、リーダーと共にあっちこちの山やルートを登り歩く。やがて技術が向上し、自分がリーダーとなって行く頃には山から遠ざかってしまう。これは社会のいろいろなしがらみによって、行きたくても行けないのかもしれないが、残念なことである。残された者は、新人訓練をしなければならぬし、自分の希望のルートも登りたいし、といって休暇はそんなに取れないし、といったジレンマに陥るのである。

今回の合宿でも新人が行くことによって、山やルートを大幅に変更した。これも山岳会に入っている以上仕方のないことであり、当然のことである。ここで私の提案であるが、しばらく山から遠ざかっているベテランの皆さん、年に2回でも3回でもいいから山に行きませんか。ゲレンデでもいいのです。自分で登れなくてもいいので

す。新人に登り方を教えたり、確保してやればいいのです。行けば分かりますが、3級位のところはいくらでもリードできるはずです。ゴルフもいいけど、忘れていた山行の楽しさも思い出します。

皆さんご存じのように、我会はアルパインクライミング主体のクラブなので、ハイキング志向の方や30歳以上の初心者（やる気があれば入会可能）は入会をご遠慮願っております。したがって入会者が少ないのは当然のことと言えます。この少ない入会者を大切に育てていかななくてはなりません。古い会員のご協力を切にお願い致します。こうすることによって中堅会員はよりグレードの高いルートに登れるチャンスが多くなり、会全体のレベル向上につながるのです。

もっと会員を増やすため、ハイキング志向の人も入会させるべきだ。との意見もあるが、いったいその場合誰が面倒をみたらよいのか。現在でもスタッフ不足なのにそんな余裕はないはずである。当会は発足時からバリエーションルート登攀主体の山行という特徴をもってきた。それを会員を増やすという目的だけのため、ハイキング志向の人を入会させてどこがいい。入会者は少なくともいい、初心者でも良いから岩登りがしたい、沢登りがしたい、本格的登山がしたいという人だけで良いではないか。そのため時代の流れによって我クラブが消滅したとすれば、それはそれでしょうがないのではないだろうか。

今、私は集会や山行でしばらく顔を見ないベテラン会員の復帰を切に希望する。

(本図 記)



ムラサキシキブ

目次

岩崎会報

1993年 春号 4月～6月 第9号 ACC-J茨城

ベテランの復活を望む	・・・ 1
集会報告	・・・ 4
山行報告	・・・ 5
妙義山筆頭岩～金鶏山	・・・ 6
谷川岳一の倉沢中央稜	・・・ 8
北アルプス槍ヶ岳北鎌尾根	・・・ 11
加賀白山&白山	・・・ 16
丹波川小室川谷	・・・ 23
岳連主催岩登り訓練	・・・ 26
富士山スキー滑降	・・・ 27
水島幸男氏の還暦を祝う会と 高田夫妻の結婚を祝う会	・・・ 30
両神山尾ノ内沢キギノ沢	・・・ 33
お岩山（救助訓練）	・・・ 36
友好山岳団体の月報、会報紹介	・・・ 38
編集後記	・・・ 39

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

目 次

4月14日

出席者 本図、高田、菊地、長久保、佐藤、村上、古山、馬淵

4月17日 (水島幸男氏の還暦を祝う会。於、つくば福祉センター)

出席者 本図、木村、菊地、鯉河、中島、生井、高田、佐藤、笹沢
村上、中居、古山、長浜、広瀬、栗原、原田
その他東京より28名出席

4月21日

出席者 高田、中居、村上、佐藤、古山

5月12日

出席者 本図、菊地、鯉河、中島、古山、高田、笹沢、村上

5月26日

出席者 本図、馬淵、高田、菊地、佐藤、古山

6月10日 (高田夫妻の結婚を祝う会。於、居酒屋北の里)

出席者 木村、長浜、鯉河、川北、高木、生井、本図、菊地、長久保
村上、笹沢、古山、馬淵、佐藤、鈴木、高田夫妻

6月23日

出席者 本図、菊地、長久保、佐藤、中居、高田、馬淵

山行報告

4月 4日	妙義金鶏山	L本図、生井、笹沢 古山、庄司
4月11日	巻機山（山スキー）	L中島、高田、中居、古山
4月18日	古賀志山（RCT）	L生井、中居、古山
4月29日～5月2日	北ア北鎌尾根	L高田、佐藤、古山
4月29日～5月3日	北ア剣岳	L名雪、仲川、早川 中居（東京に合流）
5月2日～6日	加賀白山	L本図、古山、長久保
5月16日	古賀志山（RCT）	L佐藤、古山
5月16日	谷川岳一の倉沢中央稜	L本図、他2名
5月23日	丹波川小室川谷	L本図、佐藤、庄司、古山
5月29日～30日	岳連岩登り講習会	庄司、馬淵
5月30日	岳連遭難救助訓練	本図、古山
6月 6日	富士山（スキー）	L本図、古山
6月13日	両神山尾ノ内沢キギノ沢	L本図、古山
6月27日	遭難救助訓練	本図、長久保、笹沢、馬淵 高田、古山、佐藤、菊地

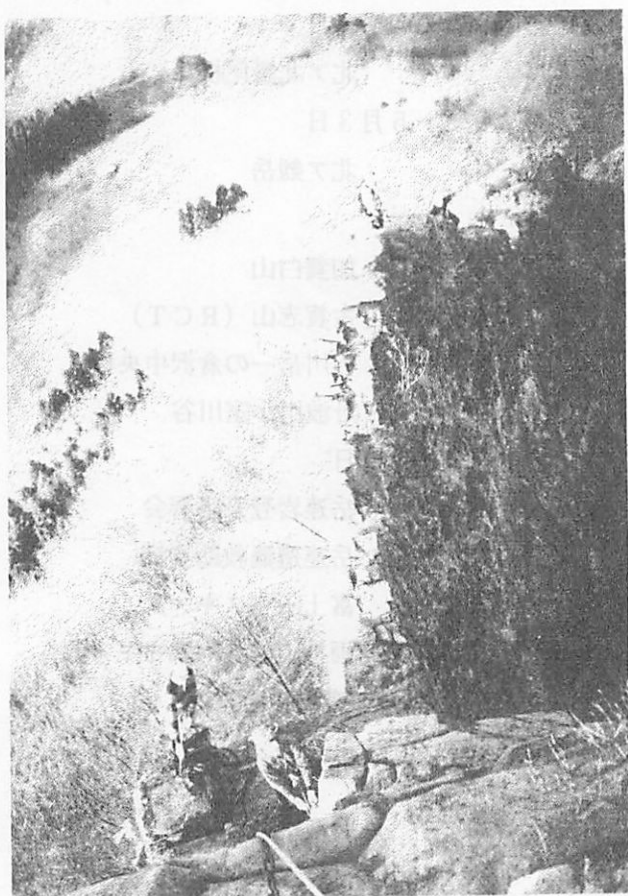
妙義山 筆頭岩～金鶏山

1993. 4. 4

パーティ L 本図一統、生井一男、古山正文、庄司真陸、笹沢ひろみ

1月に松木沢のアイスクライミングに参加して以来の山行ということで運動不足が気になる。それに加えて仮眠のタイミングをのがし、夜が明けるまで本図さんとしやべってしまった・・・ちょっと寝不足ぎみで出発となる。

車で一本杉まで行き、しっかりとした登山道に行く。途中よりザイルをだしてもらい、左右に切れたやせ尾根を通過。妙義山の荒々しい岩峰や奇岩、遠くに荒船山も見え景色がいい。バランスをくずしたら落ちそうでこわいけど、写真を撮ってもらったりしてなかなかスリルがあり楽しかった。その後は快適に3ピッチの登攀を終え、どこかのピーク（筆頭岩）にでた。小休止している間に本図さんが偵察に行き、藪の中を懸垂することになった。今回の山行は何度か藪の中での懸垂をしたが、枝がじゃまで体が思うように動かせなくていやだった。灌木帯をぬけ小さな祠のあるピークにでた。天気もいいし、風もここちよい。穏やかな春の一日がゆっくりと過ぎといく。40分いっばいの長い懸垂の後、次はいよいよ金鶏山へ。踏み跡らしい道をたどる。突然さびたくさりが出てきたりした。無事に金鶏山に到着。あとは



筆頭岩2ピッチ目、ナイフエッジの登攀

車道にでるため下る。今回も楽しい山行だった。あとは車やバイクにひかれられないようにカーブの多いアスファルトの道を歩いて車までもどった。

一本杉入り口 (6:10) -
筆頭岩 (7:15) - 筆頭岩
下 (8:25) -
金鶏山 (10:35~45) -
妙義山有料道路 (11:45
~12:00)
一本杉入り口 (12:30)

(笹沢 記)



筆頭岩 3 ピッチ目の登攀



金鶏山頂にて

一の倉沢中央稜

1993. 5. 16

パーティ L 本図一統、大月繁夫(笠間おちこち山の会)、小坂一郎(同前)

5月第3週の日曜日、初めて谷川岳一の倉沢に岩登りに行くチャンスを得た。一の倉沢は中央稜である。これまで穂高コブ尾根や谷川岳ではマチガ沢東南稜などを登ったことがあったが、一の倉に入ったことはなかった。お岩山にも時々通ったが、本格的な岩場を登る機会はそれほどなかった。本番に殆ど行かないゲレンデクライマーというのが実情に近い。ただの見物でさえ出合から見る一の倉沢は威圧的である。フォローならば登れるだろうとは思っていたが、実際に出合に立って、これから登攀するという目で一の倉沢の岩壁を見たら、そのような実情からして萎縮してしまうかもしれないとも思っていた。山を始めた頃の山に対する希望と不安と同じものを感じていた。

前日の晩に茨城を立ち、ロープウェー乗り場近くの駐車場で仮眠をとった後、出合に向けて出発した。リーダーは本図さん、メンバーは大月さんと私である。リーダーの本図さんには2年前の岳連岩登り講習会で指導を



リードする本図

受けたことがあった。昨年、大月さんは本図さんリーダーのACCJ茨城の山行に同行し南稜を登攀しており、今回も同様な山行で、幸い私も入ることができたのである。

その日は雲一つない快晴で、いつ見てもガスの湧いていた一ノ倉沢も今日は明るく、陰惨な感じは全く受けなかった。「登れるぞ」と思った。ただ、残雪が多くて下降ルートに予定していた北稜は運動靴での雪の下降トラバースがあり、難しいとのことであった。

いよいよ一ノ倉沢である。雪渓をすべりながら登り、テールリッジへ。よく耳にする名前であるが通過するのは初めてである。名前のとおり岩壁からのびる尻尾のようだ。ザイルを出して1ピッチ登り、そのあとも何とか本図さん達を追いかけて取り付きへ到着した。

取り付きから見る中央稜はだいぶ圧縮されてみえるせいか、それ程長くは感じられない。ハーネス、ヘルメット等をつけ、登攀の準備をする。すると突然、空気がブルブルと震えたかと思うと地面で鈍い音がした。落石である。音をたてて岩壁を落ちるのではなく、空気の振動とともに空中を落ちてくる落石を間近に見たのは初めてであった。やはり谷川岳の岩場である。それなりのリスクがあるのだと思った。

1ピッチ目、中央稜末端部を斜上していくように登り、ビレーポイントへ。すると2ピッチ目の出だし部分のルートが崩れているとのこと。どうなるかと思ったが、本図さんはそんなこと関係ないように確実にリードしていく。中央稜はルートが比較的複雑に思えた。3ピッチ目は左のルンゼ状を直上していくと思ったら、少し回り込むようにしてフェースを登ったりする。傾斜も所々きつく感じられ、岩ももっとガッシリしているかと思ったら、本番だから当然であるが、浮いているものも多く、慎重に登った。

ルートからみる本谷は圧倒的である。磨き込まれたスリバチのようで、吸い込まれてしまいそうである。対岸は滝沢スラブ。まだ残雪も多く、時たま落石の音もしている。となりの南稜をのぼるパーティも見える。何とも言えない胸躍る景観である。

ルートはいよいよ核心部、フェースからチムニー状の所を登る。なんとかフリーで抜きたいと思ったが、ピトンに残されたシュリングに手がのびてしまった。アルパイン(?)だからいいやとは思ったが、ちょっと残念なA0であった。

この後、フェースやルンゼ状の所をさらに数ピッチ登って、終了点に到達。天気はここにきてまだ快晴、一ノ倉沢の岩壁はもちろん付近の山すべてが見渡せる。絶景

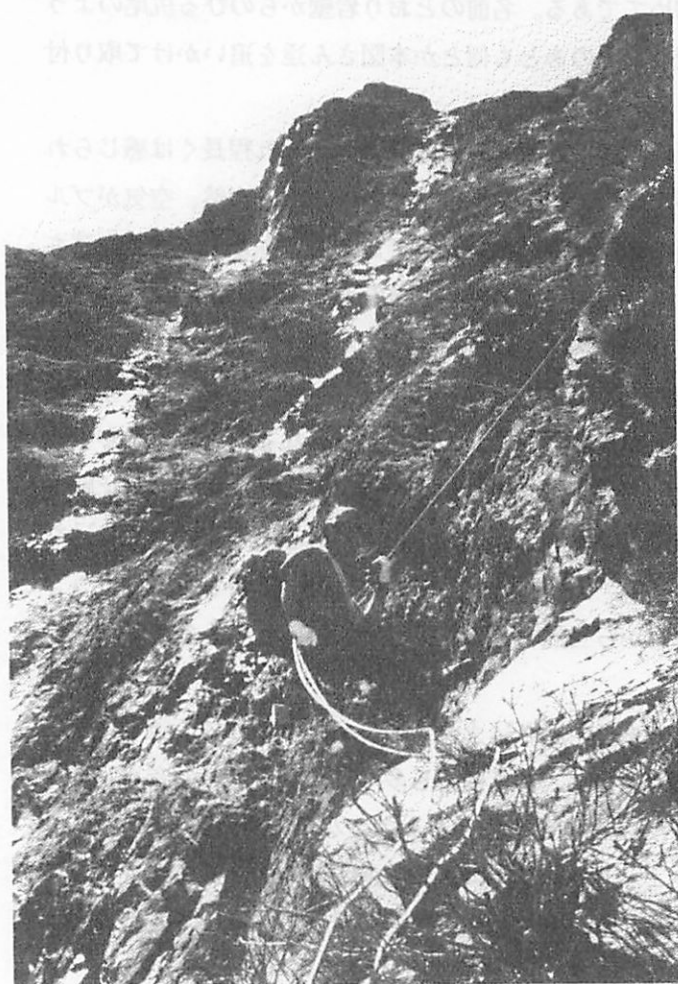
である。コップ状岩壁を見下ろし、初登攀争いでのルートなどを教えてもらった。先行パーティも後続パーティもなく、どうやら中央稜は私達の貸し切りのようであった。

昼食の後、下降へ。下降ルートは中央稜となった。まずは浮石の多いルンゼ。落石を起こさぬようかなり気をつかう。ゲレンデと違い懸垂下降もけっこう緊張した。40メートルいっばいの懸垂も初めてであったし、地形を十分理解していなかった自分には、どの方向に降りているのかよくわからなかった。登っていたときよりも、むしろこの下降のほうがより印象に残ったようだ。登攀終了よりも下降が終了し、出合に

着いたときが、「終了」であるということがよくわかった。何回もの懸垂を繰り返し、さらにテールリッジを下り、無事その終了点に着いた。

とにかく中央稜が登れてよかった。今回の山行は、初めて一ノ倉沢に入れたこと、もっともっとトレーニングしないといけないと痛感させられたことなど、自分にとって1つの大きなポイントとなるものとなった。また岩登りという山行形態をこれから成熟させていこうとする笠間おちこち山の会にとっても有意義な山行になったと思う。

(小坂 記)



中央稜を懸垂下降で降りる大月

北アルプス槍ガ岳 北鎌尾根

1993. 4. 29～5. 2

パーティ L 高田暢年、古山正文、佐藤文則

昭和63年、私がまだ新人だった時の春合宿も槍ガ岳集中を行い、その時は北鎌尾根に生井さん、川北さん、栗原さんで登り、私は本図さんと硫黄尾根を登った。その時硫黄尾根から見た北鎌尾根は槍ガ岳に直接突き上げて、とてもかっこよく見えた。過去に有名人が二人遭難しており、色々な意味で有名でありアルパインクライミングを志す者なら誰でも一度は登ってみたいルートである。毎年春合宿の時期になると北鎌尾根の事が頭の中をよぎるがなかなか実行できずにいた。しかし今年は当会の「文太郎さん」こと古山氏に声をかけたら快く乗ってくれた。そのうち佐藤も参加する事になり、念願の北鎌尾根に入る事になった。

荒川沖の駅に集合し新宿駅へと向かう、電車で山に行くのは久しぶりである。新宿23:50のアルプスで信濃大町駅までは、ACC-Jの名雪さん、仲川さん、早川さんと、この度めでたく医師の国家試験に現役で合格した当会の中居が剣に入る為一緒にあった。駅からタクシーで七倉まで入り、ここで登山届けを出し朝飯を食べる。電車の中で



岩稜を登る

飲んだ酒がまだ抜けてないうえ寝不足で頭がスッキリせず食欲がない。そのうえ小雨が降っており今日一日長いアプローチかと思うと気が重い。とりあえずは歩かなければ先に進まない。雨具を着てひたすら歩く。途中高瀬ダムあたりより雨はやんできた。少しは気が晴れる。湯俣に11:25に着き、ここで昼飯を食べる。以前硫黄尾根に登りに来たときもここで休んだ覚えがある。あの時は天気がよく暑かった。単調なアプローチもここまでで、ここからは水俣川沿いに千天出合まで途中ツルツル岩のトラバースや、崩れかけたワイヤーの吊橋ありでとても緊張した。眠気も



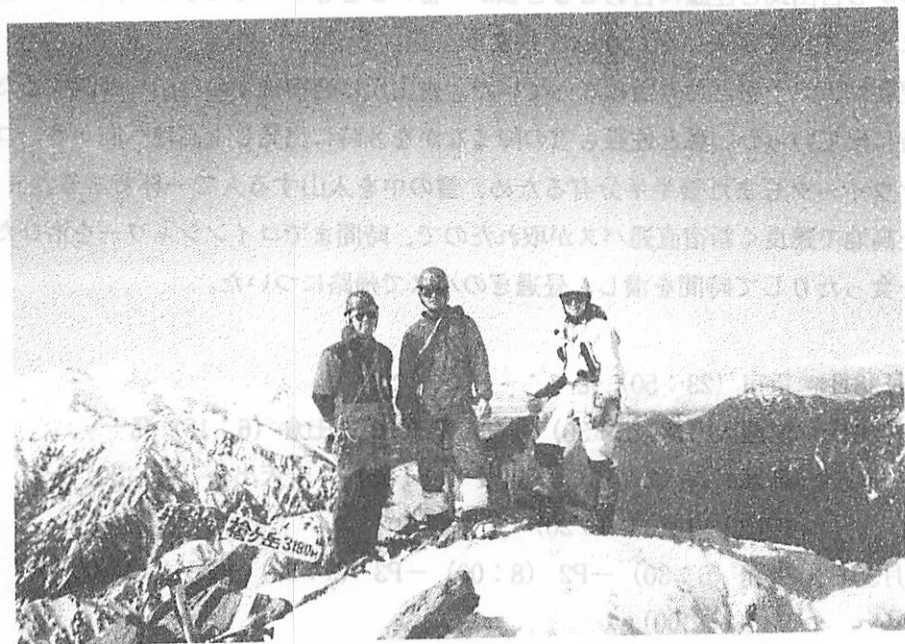
雪稜を登る

一気にさめ千天出合に着いたときはホッとして安心して、このアプローチを又戻るくらいなら意地でも上に抜けてやと思った。

30日。今日も天気は予報どおり雨。しかし停滞するほどでもないので天気の回復を期待して出発。ここからは急登になり途中フィックスロープをつかみながら、木登りピッチに行く。古山さんがピッケルを落とすというアクシデントもあったが無事回収できP2を通過、天気は雨からみぞれに変わる。雨具を着ていても下に着ているものがびしょ濡れになり体が芯まで冷える。P2を過ぎてからはアップダウンが続きP6の手前でザイルを出す。それ以外はナイフエッジの急な長い登り降りを繰り返し北鎌の科尔を過ぎP8に着く。先行の単独の男性はここにテントを張っていた。ここより少し下った科尔にもテントを張っているパーティがいた。時間的に我々もここにテントを張ることにする。テント設営後早速コンロに火をつけ暖をとる。濡れたもの

を乾かそうとするが、なかなか乾かない。私と古山氏は酒を飲み体の内面からも暖をとる。天気は夕方より回復し正面に独標が我々の行く手を阻むかのように聳え立つ。独標を越えないと槍が見えないのもこのルートの特長であると思う。

31日は昨日までとうって変わって快晴である。しかし天気予報だと又明日から悪くなるので今日中に槍を越えて横尾まで下りたいところである。独標の基部までは雪稜を行く。ルートは色々あるようだが我々は千丈沢側に少し回り込みほぼ稜線ぞいに直上した。ここはワンピッチザイルを出しての岩登りとなった。ついに独標に立ち、目の前に槍ガ岳が現れた。三日目にしてやっと拝む事ができた槍ガ岳を前に三人で写真を撮ったりして我々の意気は益々盛り上がった。ここから北鎌平までは急なナイフエッジが続き、槍ガ岳がどんどん大きくなっていく。ここに来て息が上がり、気ばかり焦りなかなかペースがあがらない。しかし槍ガ岳さえ越えてしまえば後はヘッドランプをつけてでも横尾に下れる、そう思うと気が楽である。槍ガ岳の登りは天上沢側寄りの急な雪壁を3ピッチザイルを出し、ついに頂上に飛び出た。360度の展望を楽しみながら自分達が登ってきた北鎌尾根をしみじみと振り返った。感無量の思いである。さあ、あとは横尾目指して下るだけである。



槍ヶ岳頂上にて、古山、高田、佐藤

槍ガ岳の下りは足元に注意しながらはしご場を下る。肩の小屋から古山氏が本図さんに電話をして槍沢を下る。下りながら何度も振り返ると槍ガ岳は段々小さくなり最後は見えなくなった。槍ガ岳を見るまでにあんなに時間をかけ苦労して登ったのに、見えなくなるのはあつけないものである。槍沢をシリセードで勢いよく下っていった佐藤はバテてしまった。私が佐藤の荷物を少し持つ事にし、古山氏には横尾に着くころには小屋は締まってそうだったので、先に行って途中槍沢ヒュッテでビールを買い込んでいってもらうことにした。そして古山氏と二人で先に横尾に行ってツェルトを張って佐藤を迎えに行ってもやろうかと思っていたが、槍沢ヒュッテで我慢できなくなって缶ビールを一本飲んだところ二人ともヘロヘロになってしまい、結局佐藤に追いつかれてしまった。横尾に着いたのは既に夜の8時だった。

以前屏風岩を登った時も横尾に着いたのは夜の10時だったのを思い出した。早速ツェルトを張り、打ち上げの準備にかかる。どうせ明日は下るだけなので酒と食糧を残す必要はない。佐藤はいつものごとくビールを飲んで先に寝てしまった。私と古山氏は焼酎を飲みながら、この山行を振り返った。アプローチがとても長く、とても悪かったこと。天気が悪く体中ビショ濡れになって寒くて夜あまり眠れなかったこと（しかし古山氏と佐藤に言わせると私が一番いびきをかいてたらしい）しかし登ってしまうとすべてが笑い話になってしまう。

翌朝は天気予報どおり雪になっていた。古山氏は合宿後半の白山に合流するため朝5時に出ていった。私と佐藤も雪の降るなかを8時に出発し上高地へ向かう。ゴールデンウィークもまだ後半半分有るため、雪の中を入山する人で一杯である。

上高地で運良く新宿直通バスが取れたので、時間までコインシャワーを浴びたり昼飯を食ったりして時間を潰し、昼過ぎのバスで帰路についた。

4月28日 新宿 (23:50) 発

4月29日 信濃大町駅 (5:30) - (TAXI#5090) - 七倉 (6:15) 発 -
高瀬ダム (7:40) - 湯俣 (11:25) - 千天出合 (15:50) -
P2取り付き (16:20)

4月30日 出発 (5:30) - P2 (8:00) - P3 (9:00) - P6 (12:00) -
P8 (14:00)

田記)



加賀白山

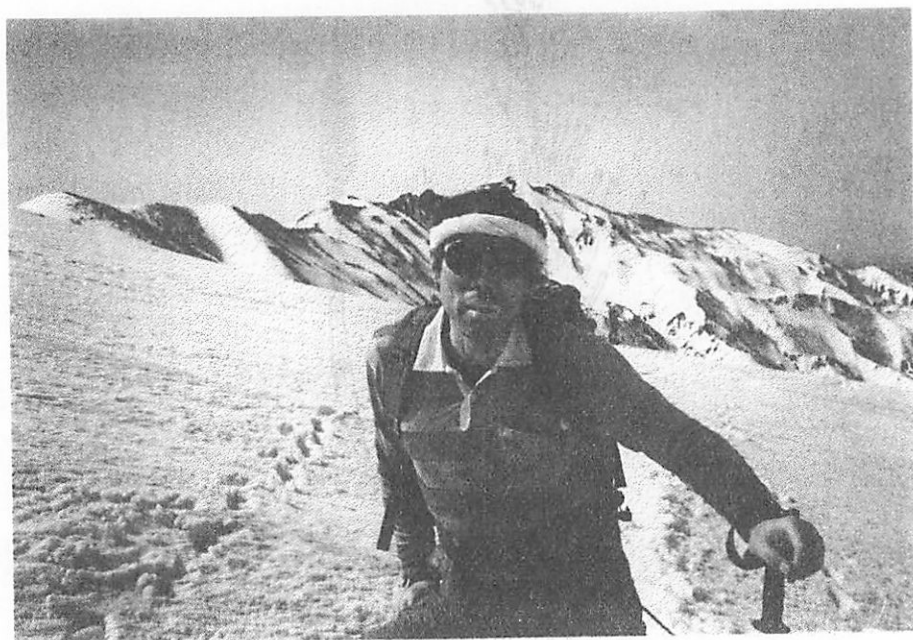
1993. 2~5

パーティ L 本図一統、古山正文、長久保加寿子

今年のゴールデンウィークこそは山登りに費やそうと決めていた。しかし、この時期はまだ雪山であり、技術も装備もない私が参加できそうな山行予定はないということに気づきあきらめていた。そんな時、加賀白山の山行予定があるという連絡を受け、ひとつ返事で参加することになった。

茨城から金沢まではかなり遠く、所要時間にして8時間、走行距離は600キロ余。以前に観光で金沢を訪れたことはあるが、白山は遠くに眺める程度であり、その名のとおり白い山だなあと思う位であった。しかし今回の山行でなんとなくつかしいような思いがよみがえってきた。

初日目はあいにくの天気で風雨は午後まで待ってもいっこうにあがらず、車の中で待機することになった。何をすることもなく一日は過ぎたが何年前！？のものかわか



おばQになった本図

らないホットケーキをおやつに食べたことが印象深い。夜になって先発していた古山さんがタクシーでやってきて合流。何と古山さんは14000円もかけてここまでやってきたのである。服は雨で濡れており、夕食も食べていないということであった。古山さんの意気込みが感じられる瞬間であった。

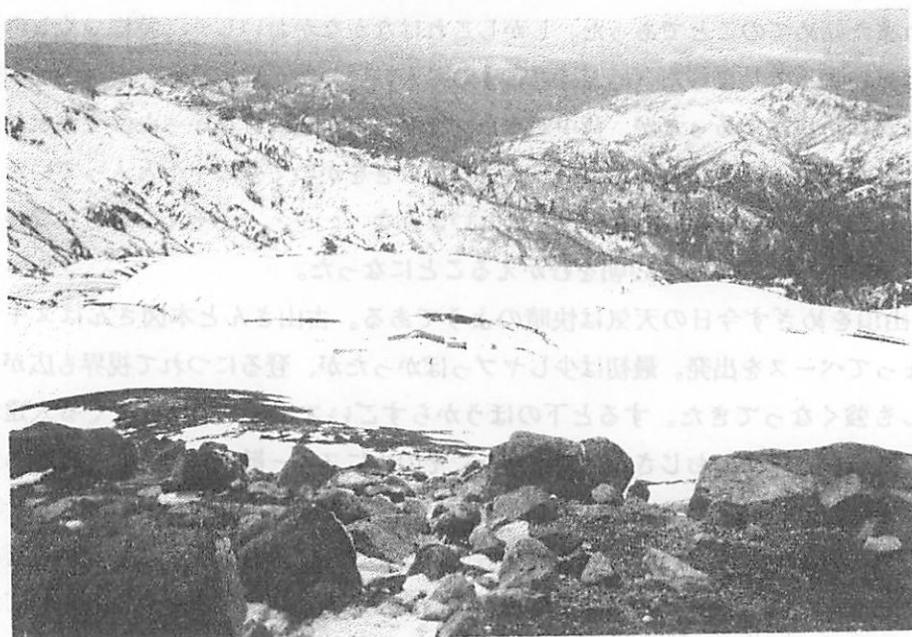
2日目は小雨のパラつく天気であったが出発。まず別当出合を目標に林道を歩いた。もう少し時期が遅ければ別当出合までは車で入れるのだが・・・・・・と思いながら歩いていると林道はだんだん雪深くなってきた。そんなとき、私と同じ雨具を着ているおじさんが私達を追い越していった。何か縁があるのではなどと考えているとあっというまにその姿は見えなくなった。その頃には天気も回復し日も差すようになってきた。ようやくお昼ころ別当出合に着きソーメンを食べた。そこにはさっきの同じ雨具のおじさん達のパーティがテントを張って待機していた。話によるとそのおじさん達は八王子からきているということであり、明日一気に登頂をねらうということであった。私達が出発する頃にはだいぶうちとけて「お姉ちゃんががんばれよ」と声援をうけた。

ベースに着くとまず天幕設置の為に整地である。そして飲み水の確保等、私にとっては初めての経験ばかりであった。そして山菜の天ぷら、ふきのとうにつくしまで、これまた初めてのことであった。しかしこれはなかなかおいしく、特につくしの天ぷらは気に入ってしまった（ほどほどにするのがいいのだが）。また、テントでの生活もなかなか快適であったが、背中が冷たくてなかなか寝つけなかった。それとは逆に古山さんはシュラフに入るそうそう大きないびきをかいて夢の中へと入っていたようであり、うらやましいような、うらめしいような・・・・・・。そんな私もいつのまにかうつらうつら寝てしまい朝をむかえることになった。

山頂をめざす今日の天気は快晴のようである。古山さんと本図さんはスキーをしょってベースを出発。最初は少しヤブっぽかったが、登るにつれて視界も広がり日差しも強くなってきた。すると下のほうからすごいスピードで登ってくる人達がいる。昨日の八王子のおじさん達であった。その中にスキー靴をはいて登っているおじさんもいたのには驚いた。私も登り、やっと思ノ助ヒュッテに着いた。ヒュッテは屋根を少しのこすのみで、すっぽり埋まっていた。ここで少し休憩。私は日焼け止め対策にとりかかった。タオルを巻こうとしていたがうまくいかず、それをみかねてか、どこかのお姉さんが日焼け止めクリームを私にくれた。本図さんもくちびるに白いリップクリームをぬっていたが、あまりにオバケのQ太郎に似ていたので大笑いをし



白山頂上にて、古山、本図、長久保



頂上より室堂小屋を望む

てしまった。それから室堂を通り山頂へと登っていった。

山頂は快晴であり、まわりの山々をきれいに見渡すことができた。しかし私は登頂できたということに胸がいっぱいで、まわりを見渡す余裕は余りなかった。少し休憩をし、ベースまで下ることにした。ここから本図さんと古山さんはスキーですいすい、私はアイゼンをつけ雪にずぼずぼ入って転びながら下山をした。下山途中、白山の雪と持参した缶詰のあずきで作ったぜいたくなかき氷を食べ、のどをうるおした。ベースまで下山の計画だったが、車の所まで下山することにした。別当出合からの長い長い林道を通してようやく到着。疲れたという思い、やったあという思い、複雑な気持ちであった。すぐに白山温泉に入り疲れをいやした後、お酒を飲んで山の話に花を咲かせた。

そして翌日は福井の永平寺を見学、富山のホタルイカの刺し身をごちそうになった。今年のゴールデンウィークは盛りだくさんな計画、初めての経験、筋肉痛という得る物が大きく忘れられない山行となった。

(長久保 記)

白山

すったもんだの末、加賀白山に行くことになった。前から行ってみたい山の一つだったので、ぜひスキーで滑ろうと期待は大きく膨らんだ。

1日夜、土浦協同病院前集合。といっても村上さんが急用で行けなくなったので俺と長久保さんの2人だけ。古山は北鎌から連続で現地で合流する予定である。ただひたすら走る。関越道～北陸道。長い、永い、ながい道程である。おまけに富山辺りから雨も降ってきた。天気予報は当たっているなと思いつつ横を見ると、うちのナビゲーターは気持良さそうに舟をこいでいるではないか。まあいいか、と思うも頭をあっちこっちにぶつけるので心配になってきた。彼女の頭はどうでもいいけど、俺の車はだいじょうぶだろうな。市之瀬に着いた頃は完全に明るくなり雨も本降りになっていた。車の被害はダッシュボードとコンソールボックスの少しのへこみとフロントガラスのヒビで済んだ。なに！彼女の頭はどうしたかって！彼女は目を覚ましたら何事もなかったように平然としていたので相当の石頭だと思うよ。

2日。予定では中飯場跡まで行くはずであるが、外は嵐である。風で車が揺れるくらいだから相当なものだ。停滞するほかあるまい。こんなとき用にと、名？迷？食当はホットケーキの素を持ってきたのである。ジュー、オイチーいほったおちそ！長ちゃんは喜んで食べている。この人はいつもろくなもの食べていないなと思った。いまだからバラスけど、このホットケーキは4～5年前の不帰合宿の残りなのだ。こんなもので喜んでもらえるんだったら又御馳走してやるよ長ちゃん。でもあと一袋しか残っていないけど。退屈な一日もやっと暗くなってきたころタクシーが横に到着した。みると古山だった。金沢から来たとのこと。ただただご苦労様のひとことである。ビールを飲みながら北鎌の話に花が咲く。明日は雨でも出発することにする。

3日。あまり良い天気ではないが回復の兆し、出発だ。少し歩くと左足のいつもあたるところが痛くなってくる。兼用靴がもったいないけどおもいきってインナーを切ることにする。少しは楽になったけど結局でかいマメを作ることになった。別当谷出合でふきのとうを洗っていたら八王子から来たという4人ずれのおじさんが「ふきのとうを洗っちゃだめだ！にがくて食えなくなるぞ！」と教えてくれた。そんなこといままで知らなかったなあ。別当谷出合を過ぎるとやぶこぎだ。スキーの板がひっかかり、えらく体力を消耗する。中飯場跡にテントを張り、道すがら摘んできた、ふきのとうと、つくしのてんぷらを肴にビールをまずは一杯。うまいんだなこれが！なに、どこかで聞いたことがある言葉だって！深くは追求しないこと。これが楽しみで山に登ってんだから。

4日。天気良好、よし行くぞ。古山は板をザックにくくりつけ、俺はひっぱり、長ちゃんはピッケル姿と3人三様である。雪がクラストしているのでちょっと歩みにくい所もあるが一歩一歩ゆっくり登る。甚ノ助ヒュッテは完全に雪の下だ。誰かが掘り出し出入りできるようになっている。それがちょうど蟻が出たり入ったりしているようでおもしろくも感じた。ここで小休止とする。後ろからすごい勢いで登って来た人を見ると昨日の八王子のおっちゃんだった。なんとスキー靴である。長ちゃんは日焼けを気にして、あーじゃないこーじゃないと対策を考えていると、近くにいたとっても美しい女性が“それじゃだめだわ”と言って日焼け止めクリームをわけてくれた。このクリームが抜群にきくクリームで彼女は全然日焼けをしないで済んだ。

甚ノ助ヒュッテからは左にトラバースし、黒ボコ下の急斜面を登り弥陀ヶ原に出る。弥陀ヶ原は視界がないときのために赤旗が点々と立っている。室堂小屋はかなり大きい小屋ですでに営業していた。ここから頂上まで一登りだがつらい登りである。



白山を滑る



甚ノ助ヒュッテで氷あずきをつくる

頂上には10人位の人がいた。景色は良くしばしの休憩とする。

いよいよ待望の滑降である。ルートはいくつか選べるが、長ちゃんが歩きなので登ったルートを降りることにする。頂上付近の雪質はザラメの上にうっすらと新雪があり、コンディションはまずまずといったところ。傾斜も手頃な大斜面。各自、思いおもしろいシュプールを描く。俺はこういう所を小さく、ちょこちょこやるのは嫌いだ。大パワで思いっきりスピードをだす。でも彼女が歩きなので30秒も滑ると10分待ちの繰り返し。黒ボコの急斜面は6ターンで降りる。甚ノ助ヒュッテで大休止。俺とおきの氷あずきの登場だ。長ちゃんは又ほっぺたがおちる。ホットケーキでおちて又落ちて、もうみられた顔ではない。この下の斜面も木々の間を快適に滑る。中飯場跡に着くと、日もまだ高いし、市之瀬まで下りて温泉に入り、大宴会をするということで話がまとまる。さすが荷物を全部背負うと思うように滑れず難儀した。温泉の後のビールは最高だが、彼女はあまり飲めないとのことであまりつまらなかった。当会においては登山技術はもちろんだが、アルコールのほうも訓練していただきたい。(俺個人の意見)

5日。帰る日だが、まっすぐ帰るのももったいないので、永平寺に行く。俺は、ここがたいそう気に入ってしまい、お坊さんになって、ここで少し修行をしてみたくなったのである。いろいろな雑念を払い、清い心でこれからの人生をおくりたい、と思ったのであるが、しかしだ、今はそんな気持はなくなってしまった。だって、良く考えてみたら、永平寺に入ってしまったら山に行けねーもなー。

途中、富山に寄り、ほたるいかに刺し身を食べるべく例の店に行く。あれ！道がねーよ。駅前開発とかで変わってしまった。店もなくなってしまった。そばにいたおじさんに“何処でもいいから、ほたるいか食わせてくれるところある”と教えてもらう。もう一つ。糸魚川で佐藤お薦めの「すみいか」を買って帰路につく。でもこれは俺の好みではない。普通の塩辛のほうが俺は好きだよ。

5月3日 市之瀬(9:45)ー別当谷出合(12:00~13:00)ー中飯場跡(15:00)

5月4日 中飯場跡(5:50)ー甚ノ助ヒュッテ(7:35~8:00)ー頂上(11:05~11:45)ー中飯場跡(13:40~14:40)ー市之瀬(17:25)

(本図 記)

丹波川 小室川谷

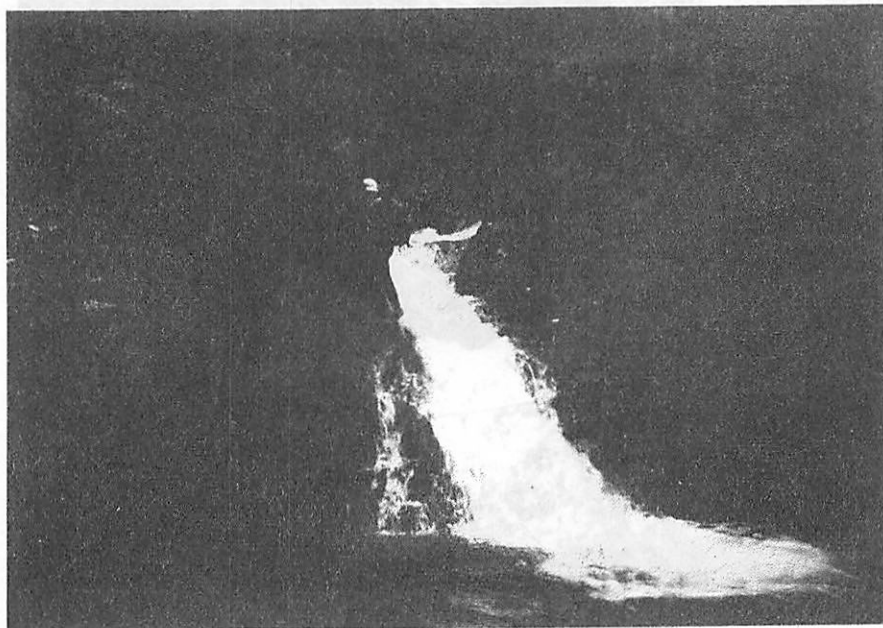
1993. 5. 23

パーティ L 本図一統 古山正文 庄司真陸 佐藤文則

丹波川と言えば、川面に髪の毛が見えた気がする、と原田さんが言っていたちょっとおっかない印象がある。今回はその石碑のある地点より下流にある丹波川支流の小室川谷の遡行である。（怖い話は原田さんに直接お聞きください。）

下妻に集合し、一路奥多摩を目指す。いつものごとく眠さに勝てない佐藤はいつの間にか眠りに落ちた。車の横揺れが大きくなり、うっすらと山道に入ったなと感じ始めてしばらく立ったころ、突然寒気を覚え、目を覚ました。そこは、例の石碑のある場所だった。偶然と言えばそれまでだが、やはり気味の悪さを感じる出来事である。少し下流の小室川出合いまで戻り車を止め眠る。

6時40分に出発し、最初に踏み跡を見逃し尾根を登り過ぎた他は順調に遡行する。本図大先生の指導の元、冷たい冷たい沢にジャブジャブと入り、歓声を（悲鳴を）あげながらシャワークライムで滝を登り、ゴーロは”のぞみ”のように早く駆け抜け、素晴らしい遡行技術で大菩薩嶺を目指す。



S字峡、ここで庄司は釜にドンブリコ



溺死寸前の佐藤



30m大ナメ滝の登攀

そこに現れたのが、ワサビの葉っぱである。止まらない訳がない。一時休止となりM氏とF氏は荒れたワサビ田の跡地に残っているワサビ採りに興じる。ひとしきり遊んだ後遡行を続ける。ナメ滝をへつり、釜を泳ぎ、滝を突破する。岩では味わえない感覚だ。S字峡のゴルジュ帯でアクシデントは起きた。

トップは佐藤である。無理だろうの声を聞きながらも行ける気がするので取っ付いて見る。先ず淵を泳ぎ水流のある滝の左壁に取り付く。水中のホールドを見つけ、体を引き上げる。右手に強い水流を感じながらそれに対抗するように上を目指す。押される力が強くしっかりとしたホールドでないと安心できない。やっとの事で滝の上にする。しかし、滝のうへはまた滝になっている。この滝の釜のトラバースもいやらしい。一步足を滑らせれば流れに乗り下の滝壺まで行ってしまふ。慎重にホールドを選んでへつる。やっとの思いで釜を回り込みOKの合図を出す。ザイルは出さないで庄司さんがくる。うまく滝を登り落ち口まで来たが、次の一步が出ない。決心したように右足を上げホールドを捜し出した。しかし、左足が水流の中に残っていたため右足がホールドを見つけるより早く水流に流されてしまった。幸いにも、滝壺に落ち本図さんと古山さんのいるところで止まった。古山さんが、先に来た後、庄司さんも2回目は上手くのっこし滝の上にする。しばらく行くと今度はナメ滝である。左岸の残置シュリングをつたいながら抜ける。ここで、ザイルを出すか支点に手間取っているうちに本図さんが登りきってしまった。2人を確保して、ザイルをしまふ。快適にナメや小さな滝を越えて行くうちにジャヌケ沢出合いになる。ここで昼飯を取る。本流と支流の見分け方を聞き、本流を詰める。水が少し流れる程度の源流に近い小さな滝を幾つも越える。沢から草付きに入ると間もなく稜線にでた。登攀具を片付け大菩薩嶺に行き、下山。参考コースタイムの倍近くかかったとは言え、充実感のある素晴らしい遡行となった。

5月22日 下妻市役所(21:30)

5月23日 車止め(1:30)一起床(6:00)一出発(6:40)一

ワサビ田跡(9:30)一ジャヌケ沢出合(12:25~40)

一稜線(14:20)一大菩薩嶺(15:00)一

丸川峠(15:55)一泉水谷(17:00)一車止め(17:40)

(佐藤 記)

岳連主催岩登り訓練

1993. 5. 29~30

参加者 馬淵勝則、庄司真陸

私が会に入ってからすでに一年がたった、が岩登りの”ホンバン”は未経験のままだ。べつに避けているわけではないのだが、日程が合わなかったり、または日程が合ってもそのルートは私のレベルでは死んでも無理であったりと偶然が重なり1年がまわってしまった。私自身も岩登りには多少の（本当は目一杯の）抵抗がある。センスがないというのはもちろんだが、それ以上にあの窮屈なクレッターシューズに辛抱ならない。あんな我慢をするよりも沢登りで滝から落ちる方が100倍楽しい。でも岩登りに行くときもみなさん誘って下さい。というわけで岳連岩登り講習会である。

私は51号を直行するので、馬淵くんに勝田まで出てもらいそして一路御岩山へ。途中道に迷ったり、ベント車内でエッチしている熟年コンビに行く手を阻まれたりしたせいで若干遅刻をしてしまったが、その場はのんびりしたものでほっとした。1日目はザイルワークの勉強、お手軽結びプーリンは”ダメ”とまではいわないがすすめられない、8の字を使用するようにとのこと。このことは2日間を通じてくどいほどいわれた。どのような状況だか忘れてしまったが、プーリンを使ってしまったために救出できるはずだった人を失敗して落としてしまう苦い事故があったそうだ。プーリンは手ごろで安心といった印象があったためにちょっとショックである。夜中、本図さんと古山さんが明日の救助訓練のために参上した。来て早々本図さんは岳連のトップ会談へ出かけ、その間馬淵くんとわたしは古山さんにワインをごちそうになった。

2日目は実地訓練だ。この日新品のクレッターを履いたのだが30分おきにくつを脱がないと我慢できない。店員にはこれでもデカイといわれたがそんなウソだ。1日だけで両おや爪が真っ黒に、内出血を起こし3ヶ月たった今もまったく直らない。せっかく買ったクレッターだが、どうやら買い直さねばならないようだ。プラブーツとクレッターの違いがあるが、ACCJ一栃木支部にも同じ運命に陥った人が最近いたような気がする。そんな逆境のなかでの訓練ではあるが、歴史あるACCJの名を汚さぬために、偉大なクライマー本図さんの顔に泥を塗ってはならないとの一心で頑張った。（そんなことないか）

内容は、今まで高田さんをはじめみなさんに連れてきてもらった復習といった感が

強いがやはりまだまだ、独りで通いプルーシックで練習しないとダメだなあ。

(庄司 記)

富士山スキー滑降

1993. 6. 6

パーティ L 本図一統、古山正文

富士山スキー滑降・・・なんと格好の良い言葉でしょうか。私はこの言葉に誘われて今まで何回この山行を計画したかわかりません、ハイ。その度にパートナーの都合が悪かったり、天気予報が悪かったりで中止になりました。去年なんかは5合目まで来たのに悪天で敗退したのです、ハイ。さて今年はどうでしょうか。

夜が明けてみると天気いいじゃないですか。でもちょっと待ってください。天気いいのは結構ですが、山には雪が見えないじゃありませんか、ハイ。所どころにあるだけで、私がイメージしていた超特大一枚バーンはどこにもないのです。どーしよーかなー、かえろかなーかえるのよそおかなー。あれ！これ又失礼致しました。歌の文句になっちゃいまして、ハイ。グループ・ゼフィルスゼフィルスの田沢氏が来ているはずなので、探してみましたが見つかりませんでした、ハイ。そうこうしているうち、板をかついだおにいさん達がゾロゾロと登って行きます。何処かの大先生がやったロックスキーじゃあるまいし、雪のないのに登ってもしょうがないと思いませんか、ハイ。そんじゃ私達も行きましょう、と出発いたしました。ここが我がパーティの柔軟なところ、悪く言うと優柔不断とも言いますけどね、ハイ。

登りだすと頭痛が痛いのです。その痛みはとても疼痛疼痛が痛いのです、ハイ。5合目で大休止。私が富士山で高山病になるわけがないでしょうに・・・でも我慢できなくて日本が生んだ妙薬「ノーシン」を飲みました。すでに登る気を無くしている古山がここぞとばかり“下りましょうか”と誘いをかけてくるのですが、私は、そんなに軟弱ではありません。もうちょっと行ってみよう、と又歩き始めたのです、ハイ。すると6合目から雪がでてきたのです。もう足は止まりません。ノンストップ気が付いた



8 合目にて 古山



8 合目付近を滑る本図（もっと真中にいれてね）

ら頂上でした。寒いので記念撮影をして（霧のため、現像したら写っていない）早速滑降にうつりました。頂上直下は石が出ているので50分ばかり歩いて下りました。

いよいよ滑降です。斜面の広さはある程度あるのですが、シュカプラのできそこないみたいなやつと、人の滑った跡であまり快適ではなく、小回りターンで降りるほかありません。夢にまで見たあの大パラでダイナミックに滑る姿はどこにいつてしまったのでしょうか。私は滑る技術としては、小回りターンは嫌いではありませんが、山スキーは絶対大パラでぶっ飛ばすにかぎるのです、ハイ。プルトーザードで板をはずし、また小回りターンで20度から25度位の斜面をどんどん降ります。さすが日本一の山、息が切れて休まなくては、私の体は壊れそうなのです。30秒滑っては2分休みが私のパターンでありました、ハイ。6合目までで滑りは終わり、また板をかついでトコトコと歩いて今回の山行は終わったのであります、ハイ。

いま思い出してみますれば、日本一高い所を滑ったという満足感がありますが、滑りそのものは、いまいちだったかなという感じがしないでもありません。来年も楽しい山スキーを求めていきたいと思います。どうぞ読者の皆様乞うご期待くださいませ。またお会い致しましょう。さようなら

乱文乱筆にて失礼致しました、ハイ。

新5合目（6：40）－頂上（11：20～40）－滑降開始（11：50）
－6合目（12：45～13：00）－新5合目（13：40）

（本図 記）



ユキフリソウ

水島幸男氏の還暦を祝う会と高田夫妻の結婚を祝う会

4月17日、つくば福祉センターに於いて水島幸男氏の還暦を祝う会が盛大に催されました。水島氏はACC-Jの創設者の一人で、今は少年野球の監督をやっているためか、山のほうはほとんど御無沙汰のようであります。私が新人のころ“よう本図、今度の日曜日あいてねーか、八ツで登りてーとこあんだよな。ガマ滝沢っていうんだけどよ。ザイル持ってきてくれればいいんだよ”などとよく誘われたものだった。その時私は行けなかったが、ガマ滝沢に執念を燃やしていた水島さんは後日でかけて行った。何度か挑んだようであるが、敗退したり、間違ってノロシバ沢を登ってしまったりで、ついに登れなかったと思う。常にクラブの中心になって動いていた水島さんの還暦の祝い。遠くは岐阜のほうからも来てくれた。全部で40数名が集まった。

祝辞、水島さんの挨拶、乾杯、記念品花束贈呈、自己紹介など宴は盛り上がる。特に私はまるで同窓会のような気分になってしまった。私が一ノ倉滝沢下部トラバースルートで転落したとき、止めてくれた奴。前穂4峰東南壁で転落したのを止めてやった奴。明星山南壁のルート開拓に共に通った奴。ヨーロッパアルプスの登攀に共に情



水島氏の還暦を祝う会



高田夫妻の結婚を祝う会

(58 国本)

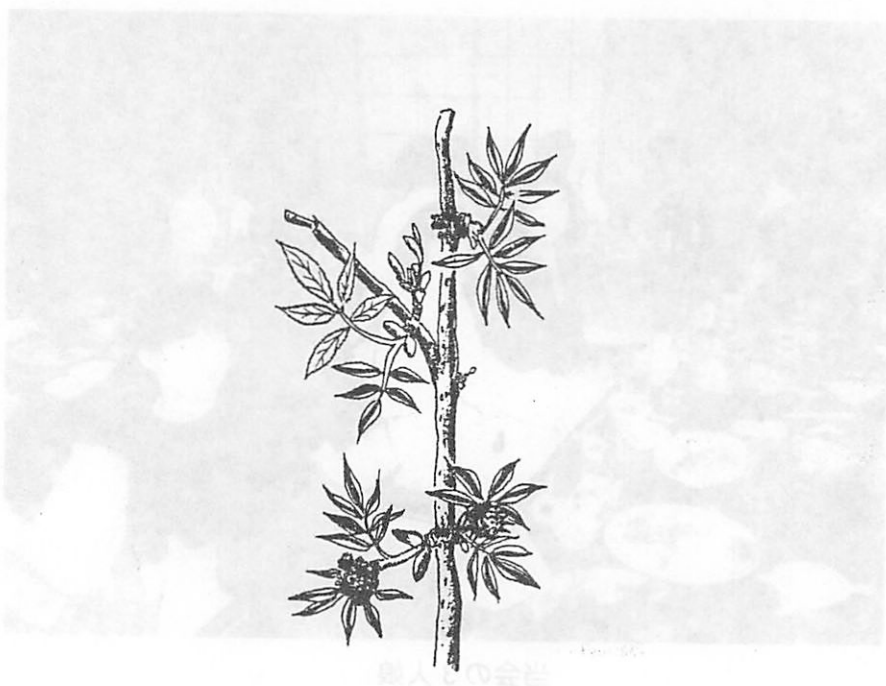


当会の3人娘

熱を燃やした奴。ヒンズーラジ遠征の時の隊員達。もうなつかしい顔、かお、カオであった。しかし昔の顔ぶれの中に中野融ちゃんの顔がないのに、一抹の寂しさを感じたのは私だけでしょうか。皆さん、山には行っていないようでしたが元気でお過ごしのように安心致しました。水島さん、念願のガマ滝沢、今年の冬行ってみませんか。

続いて6月10日、高田君と旧姓原田さんの結婚を祝う会が居酒屋北の里で行われました。茨城では初めてのカップルで、当日は集会にもめったに顔をださない連中まで、万障繰り合わせて出席してくれました。菊地幹事がお二人に記念品を贈呈した後は、この幸せ一杯の二人を酒の肴に宴会も最高潮に盛り上がりました。普段山に行かない人も、こういう場では山の話に花が咲き、やはり皆、本心、山は好きなんだなあと感じた一時でした。その中で、山にもスキーにも行けなくてつまらないようと言いながら、幸せを絵に書いたような顔をしていた高田若奥様が印象的でした。聞くところによると、8月には二世が誕生する予定だそうです。いつまでもお幸せに……OB会員の皆様、4月6月と続いて忙しい中、ご出席くださいますありがとうございます。今度は是非、山でお会いしたいと思います。近ぢかの復帰を心からお待ちしております。

(本図 記)



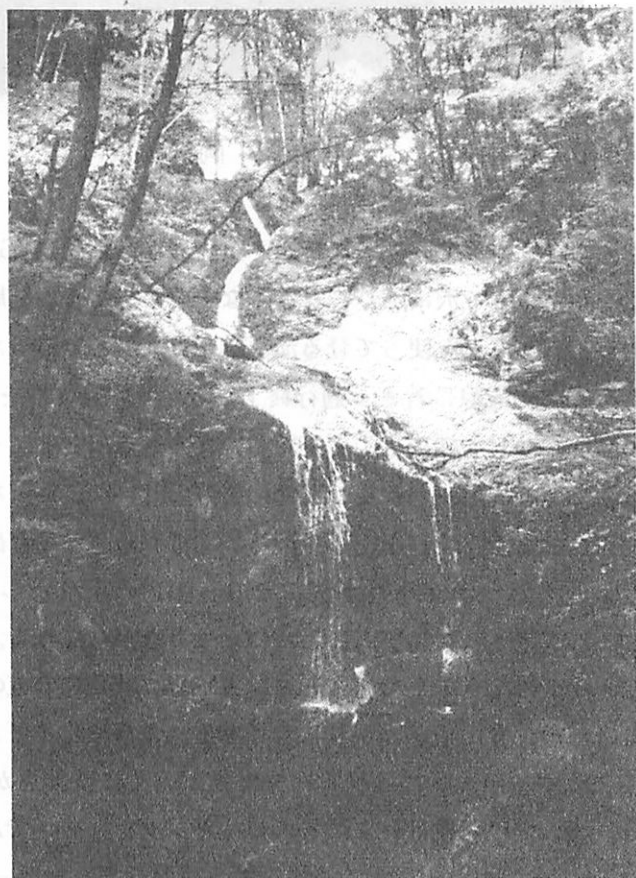
両神山尾ノ内沢キギノ沢

1993. 6. 13

パーティ L 本図一統、古山正文

今回は、本図さんが風邪気味ということで、水流が少なく、あまり水に濡れないような沢を選び、両神山の北側の尾ノ内沢の支流のキギノ沢の遡行を行った。前夜下妻市役所駐車場に集合し、熊谷、秩父経由で尾ノ内沢に向かった。尾ノ内沢登山道入り口付近に駐車し、例のように車内小宴の後就寝。

翌朝5時に起き、朝食を取った後出発。キギノ沢の出合までは尾ノ内沢沿いの登山道を徒渉を数回行いながら進む。この登山道はザレ場を通過することが多く、足元が崩れて嫌らしい。約1時間ほどで大きな岩のあるキギノ沢出合に着く。ここで溪流靴にはきかえ、ハーネス、ヘルメットを着け入溪。キギノ沢は急な沢であり、結局、尾根にでるまで勾配の緩むところはなかった。沢の中間ぐらいであろうか、この沢の核心部であるゴルジュに着く。ここは左岸に高巻く。高巻きの途中ゴルジュの一部を覗いたが水流は見えず、ゴルジュの深さに驚いた。高巻きの降り口がよくわからず、本図さんが何度も偵察にでる。安易に懸垂



キギノ沢は傾斜の強い沢だ



両神山頂にて

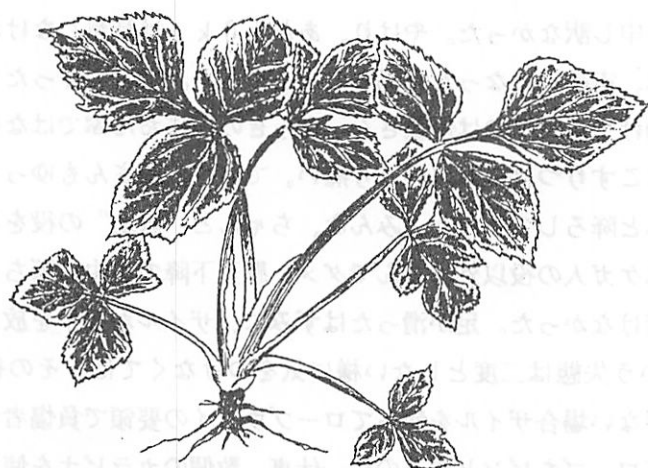
で沢に降りればその先の遡行が不可能になり結局登り返しになるし、高巻きしすぎれば一回の懸垂で沢に降りられなくなるためである。結局降りたところは、ルート図によると、あぶみを使って登る滝を越えたところであった。この後は特に問題となるどころもなく稜線に着き、遡行終了。沢登りの身支度を着替えて両神山頂に向かう。

山頂には、すでに登山者が数名いて、さらに登ってくる人達も数人いて、人気のある山であることがわかる。我々の格好のせいか、何となく場違いな感じがして、行動食を食べた後すぐに下山し始める。尾根からキギノ沢出合へ降りる登山道の分岐に着く頃とうとう雨が降り出す。この登山道の下りだしには鎖が2百メートルくらい(?)固定されていて、これにつかまりながら降りる。さらに下ると、森の薄暗さに加え雨天の暗さのため、さらにはガレ場、ザレ場の道のため、所々に標識がつけてあるのだが、登山道がわかりにくくなる。ようやくキギノ沢出合に戻り、朝来た登山道に合流するが、朝には簡単に来た道がとくに徒渉点がわかりにくい道となり苦労した。履いていた靴は、ふつうのジョギングシューズであったが、車に戻る頃には外側の布の部分が所々破けていて、下山道の悪さを物語っていた。今回の山行の核心部

は、この下りではなかつただろうか？。暗くなる前に、車に戻り、帰路に着いた。

中の沢出合（5：25）－キギノ沢出合（6：30～55）－
2番目のゴルジュ入り口（8：10～20）－ゴルジュ上の大岩（9：30～40）
－稜線（10：35～55）－両神山頂上（11：15～30）－
奥宮（12：15～25）－キギノ沢出合（13：50）－
中の沢出合（15：00）

（古山 記）



お岩山「救助訓練」

1993. 6. 27

参加者 本図一統、菊地光夫、生井一男、高田暢年、佐藤文則、笹沢ひろみ
長久保加寿子、古山正文、馬淵勝則

日曜日に丸一日、救助訓練、岩トレをお岩山で行った。26日の晩、千代田町役場で集結した後、一隊はお岩山へ。そこで古山さんと合流し、お約束のように宴が開かれた。ロケット花火を打ち上げたりして、みんなで、はでに盛り上がる。ACCJに入会するまで山での酒盛りはご法度かと思っていたが、それは大きな勘違いだった、とちよっぴり考えが変わった。でも、酔いながらも明日に備え、ザイルワークはちゃんととり行われた。

翌朝は岩場で救助訓練、まず、負傷者を背負っての懸垂下降が本図さんによって模範演技された。負傷者の役は74kgもある僕。本図さんが潰れちゃわないかとおっかなびっくりだったが、流石にきちんと安定したまま降ろしてくれる。『重たいだろうなあ』と少し申し訳なかった。やはり、あと10kgは減量しなければまずいかもしれない。次は、宙吊りになった負傷者の役をやった。岩肌でぐったりとしたふりをしている僕を助けてくれるのは佐藤さん。さっきの様におんぶではないので、降ろされる分だけ岩にこすりつけられ以外とり痛い。でも、佐藤さんもゆっくりではあるが着実に下へ下へと降ろしてくれた。みんな、ちゃんと“救助”の役をこなしているというのに、僕はケガ人の役以外ではてんでダメ。懸垂下降の途中で落ちそうになってしまい、とても情けなかった。足が滑ったはずみに、ザイルから手を放してしまったのである。こういう失態は二度としない様に気をつけなくては。その後、場所を変えて、ウインチがない場合ザイルを使ってロープウェイの要領で負傷者を降ろす練習をした。たるんだロープをピンと張るのに一仕事。数個のカラビナを使い支点を作り、そこにザイルを何重にもくくり、徐々にたるみをしめあげていくのである。これも、本図さんがいるからこそ見れる技術かも知れない。

空中懸垂下降のときは、生まれて初めて確保をやらせてもらった。トップロープでぶらさがった生井さんのビレイをしたのである。僕が手を放したら生井さんが落ちるのかと思うと、とっても胃が痛かった。佐藤さんがよく“ビレイだけはきちんとマスターしとけ”と、ビレイの重要性をいつも話してくれるので、このときは、実は、か

なり緊張していた。

今日は、救助訓練という名目だが、あいまをぬって、僕、笹沢さん、長久保さんは岩トレもやってもらった。まだ、シューズをもっていない僕は運動靴だったのだが、当然の様にすべって全然のぼれない。道具のせいにするのも何かかもしれないが、笹沢さんや長久保さんが普通に登れる所を、自分だけモタモタしてしまうのはとってもくやしい。このとき、“絶対に次のバイト代で登攀具一式買ってやるぞ”と熱く自分に誓ってしまった。

本図さんらが帰ってしまった後も、高田さん、古山さんは人工登攀の練習のため、生井さん、笹沢さん、長久保さん、僕は岩トレを続けるため、そのまんま居残って練習を行った。なんていうのか、岩を登るといのはとってもおもしろい。適当な形容詞が思いつかないが、登っているときは頭の中が真っ白になれて、とても良い。それに、てっぺんまで登ったときのあの満ち足りた感じが何とも言えない。うまくなれば、もっともっといい所に行けるんだろかなとこれからが楽しみである。みなさんのお荷物でいつまでもいないよう、頑張りたいと思う。それと、一つ思ったことがあるのだが、一度ビレイをしてもらうと、その人に対して一種独特の感慨が生まれる様な気がする。今回はずっと生井さんにザイルを握ってもらっていただいていたのだが、今まで以上に距離が近くなった様な気がする。（生井さんが嫌な顔しているかもしれない・・・）

とにかく、今回の岩トレはいろいろなことがあってとってもよかったです。

（馬淵 記）



サイハイラン

《友好山岳団体の月報、会報紹介》

ありがとうございました

月 報

◎Rohman NO.96 1993.4浦和浪漫山岳会

川内木六山～赤花峰～赤花尾根 奥志賀スキー場～野沢温泉ほか

◎Rohman NO.97. 1993.5浦和浪漫山岳会

尾瀬至仏山 足尾袈裟丸山小中川弓ノ手沢～本沢右俣下降ほか

◎Rohman NO.98. 1993.6浦和浪漫山岳会

春合宿海谷・732高地BC 阿弥陀沢左俣 鬼ヶ面沢 阿弥陀沢ほか

◎月報・ZAC NO.140 1993.4グループ・ゼフィルス

越後浅草岳守門岳越後駒ヶ岳 後立樹池高原～蓮華温泉 谷川芝倉沢ほか

◎月報・ZAC NO.141 1993.5グループ・ゼフィルス

飯豊石転び沢 八幡平 八甲田周辺 南会津山毛櫛沢山 尾瀬燧ヶ岳ほか

◎月報・ZAC NO.142 1993.6グループ・ゼフィルス

北ア双六岳白馬周辺 富士山 丹沢原小屋沢 奥多摩大雲取谷ほか

会 報

◎溪 年報16号 下田・川内特集 1985～1991記録集 282P 浦和浪漫山岳会

利根・上信越の山々として苗場山周辺 上越・越後 奥利根 会越周辺 南会津
積雪期の上越・奥利根・南会津などの沢や山が網羅されている。

近郊の山・東北の山・その他の山として奥秩父、奥多摩、奥武蔵、房総丘陵
西上州、足尾、船形連峰、那須、男鹿、帯沢、尾瀬、南ア、蔵王、後立などの沢と山

特集下田・川内として笠堀川光来出沢、砥沢川、大谷川、杉川、早出川本流と各
支流、積雪期の栗ヶ岳～権ノ神岳、矢筈岳～駒形山、残雪期の三川分水峰集中など
記録多数。とにかく素晴らしいの一語につける会報である。ぜひ会員の一読を
薦める一冊である

◎岳翔 VOL5 104P 1992 岳翔会

これは富山県警山岳救助隊の会報 いろいろな山岳救助の記録と隊員達の喜び、
悲しみ、苦労などが書かれている。

悲しみの北壁、東大谷の奇跡パートⅡ、ある夏の日の報告、個人山行記録など

◎岳翔 VOL6 104P 1993 岳翔会

黒部の山賊、ガモウ・バックの効果的使用、氷塊飛び散る黒部下の廊下ほか

◎山嶺 No2 39P 1993 富山県山岳遭難対策協議会

これは富山県における山岳遭難の発生状況をグラフや一覧表にまとめたもの

※ 編集後記

先号お伝え致しました高田君、原田さんの結婚式が5月15日東京上野の池之端文化センターで滞りなく厳かに行われました。おめでとうございます。

さて「R&V」も9号をむかえました。いつまでも編集部員が同じではマンネリ化してしまいます。10号をもって編集部員を改選したいと思います。どなたか希望者がおりましたら、遠慮なく立候補してくださいませ。もし希望者がおられませんでしたら、現編集部員が独断と偏見をもって人選させていただきます。まあ、いままで原稿の提出が遅かった奴か、暇を持て余している奴にしたいと思います。心当たりのある奴は覚悟しててください。新役員は次号にて発表いたします。

2年半に渡り、無事編集部員を全うできたのは、ひとえに皆様のご協力の賜物でございます。依頼した原稿は直ちに提出していただき、部員は涙の出る思いでした。これから私達は、皆様にさせていただいたと同じように、新部員に対し、涙を流して喜んでいただけるよう、誠心誠意協力していきたいと思っております。先号か先々号でおわび致しました件、つまり原稿をなくした件ですが、その後の捜査の結果、生井が原稿を提出していないことが判明いたしました。しかし生井は、悪びれた様子もなく平然としております。こういう奴が、新部員の第一候補であります。もし生井が新部員になった暁には、私達は特に協力したいと考えております。

残された10号の編集を完璧に仕上げバトンタッチいたします。

(音菜台州記)

季報「R&V」第9号 発行1993年 春

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城 〒315-01 茨城県新治郡八郷町柿岡1997

本図一統方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
